

であり今後も作成し検討していく必要があると考えられた。

4) 新潟大学医学部附属病院精神科における児童外来の現状

鈴木由紀子(新潟大学
保健管理センター)
仲丸 恵(五日町病院)
小柳 観喜(新潟県立療養所悠久荘)
橋本 道子(日本赤十字長岡病院)
増澤 菜生(新潟大学教育人間科学部
障害児研究科)

少子化が進み、子供の数が減少してきている一方で、心を病む子供の数は年々増え続けている。また激変する社会の中で子供たちの呈する問題も多様化し、複雑化してきているように思う。そのような状況に我々精神科医は対応しきれているのであろうか。

新潟大学医学部附属病院精神科児童外来は昭和48年に開設された。現在、児童外来では週1回、15歳以下を対象として診療を行っている。今回の調査対象は、1997年1月から2000年8月までの3年8ヶ月間に当院精神科外来を初診した15歳以下の患者、計201名(男性77名、女性124名)で、男女比は1:1.6であった。初診時診断をDSM-IV診断カテゴリー別に分類すると、幼児期、小児期または青年期に初めて診断される障害20%、摂食障害17%、適応障害15%、身体表現性障害13%となった。昨年報告された当科の全外来初診患者の統計では気分障害23.7%、分裂病13.8%であり、それと比較すると成人と小児とはかなり疾患分布が異なることがわかった。主訴別では「不登校」が一番多く、小学校高学年、中学生を中心に85例みられた。そのうちの4割以上が身体的愁訴を伴う「特定不能の適応障害」、「鑑別不能型身体表現性障害」と診断され、腹痛や頭痛などの身体的訴えを理由に学校へ行けず、外来を初診した子供たちであった。学校や家庭でのストレスを言語化できずに、身体化することで防衛している子供たちの様子が伺えた。また小児科、内科など他科からの紹介が半数以上あり、身体症状を呈する症例や摂食障害が多いことも考え合わせると、今後もこうした身体科との連携が重要になってくると思われる。転帰別では、初診のみや短期間の治療で終結に至る一群と長期にわたり治療継続を要する一群とに大きく分かれた。当外来は診断確定あるいは助言や交通整理的役割を期待される一方で、十分な時間や深い関わりを要する専門的治療や養育的役割なども求められているこ

とがわかった。

児童・思春期はその年代そのものが変化に富み、その時期に生じる精神障害も多種多様である。その幅広い疾患を十分扱うには、医師、心理士、ケースワーカー等様々な職種間の連携が必要であり、家族や学校の協力も不可欠である。そのような治療体制を組むには、現在の当児童外来は医師5人が一人何役もこなしている状態で、「児童外来」と看板を掲げながらも十分機能しておらず、ニーズに応えきれていないのが現状である。新潟県内では児童相談所やまぐみ学園が中心となって就学前、小学校低学年の精神障害、発達障害、虐待などに取り組んでいる。また悠久荘では専門病棟や併設の教育機関をバックに、医療、療育、教育といった多方面から幅広い疾患についてアプローチを試みている。それぞれ特色を生かした治療を行っているが、大学病院内での児童精神科医療の窓口として、当外来がどのような役割を担っていくのか、独自性を見出ししていくことが今後の課題になるだろう。

5) 柏崎厚生病院における精神科急性期治療病棟の現状——第2報

山手 威人・柳 日出彦(立川メディカルセン
ター 柏崎厚生病院)
坂井 乃美・直井 孝二(精神科)
吉浜 淳・松田ひろし
山田 治(東京大学
精神医学)
結城 麻奈・飯森真喜雄(東京医科大学
精神医学)

平成11年2月1日より当院では精神科急性期治療病棟26床をスタートし、1年8か月を経た。昨年その現状についてこの会で発表したが、今回その後の、急性期治療病棟の経過と現状を、昨年度とその後1年間に分けて比較をし、またその課題と問題点について検討した。

試行期間を含んだ平成10年10月から平成11年9月までと、平成11年10月から平成12年8月までに、当病棟に入院された患者を対象とした。

1. 入院患者の推移
2. 入院形態 任意入院の増加、医療保護入院の減少が認められた。
3. 入院、転入患者の合計数 病床回転率 増加が認められた。
4. 入院、転入患者の疾患別人数 退院、転出患者の疾患別人数 入院 退院の両方とも分裂病患者の増加が認められた。

5. 新規患者の年齢構成 30代と、70代以上が増加傾向
6. 平均在院日数 最近になり縮小している。
7. 疾患別平均在院日数 分裂病で低下、気分障害で増加の傾向
8. 再入院率 わずかに増加傾向にある。
9. 急性期治療病棟の施設基準 40%を越えることが望まれているが、60-70%でクリア

まとめ-課題と問題点

1. 平均在院日数は縮小しているが、再入院率がわずかに増加している。特に精神分裂病について、治療上現在の3か月以内の退院の是非について検討が必要と思われる。
2. 疾患別では気分障害での平均在院日数の増加が認められる。
3. 療養棟の在院日数の増加の問題が出ている。
4. 増床について、その必要性や経営面での問題点を今後考えていく必要がある。

6) アルツハイマー型痴呆における色覚反応の特徴 — 色別発光ダイオードを用いた視覚誘発電位の研究

吉浜 淳・山手 威人 (立川メディカルセン)
 柳 日出彦・坂井 乃美 (ター柏崎厚生病院)
 直井 孝二・松田ひろし (精神科)
 前畑 幸彦 (同 内科)
 山田 治 (東京大学 精神医学)
 結城 麻奈・飯森真喜雄 (東京医科大学 精神医学)

視覚誘発電位検査において、ピーク発光波長 (λ p) が、660 nm (赤) と、567 nm (緑) の2種の発光ダイオード (light emitting diode; LED) を用いたゴーグル型の刺激装置を使用し、健常成人、健常老人と、アルツハイマー型痴呆 (以下 DAT) 患者を対象として検査を行い、その色 (波長) 別による特徴について検討した。

【結果】

- 1) 健常成人群では、すべての頂点潜時で、赤 (660 nm) より緑 (567 nm) が有意に延長していた。健常老人群、DAT 患者群では、差が認められないが、有意差はないが、逆に赤が緑より延長する傾向がみられた。
- 2) それぞれの色別の群間比較については、赤においては健常成人群より、健常老人群、DAT 患者群で有意な延長が認められた。緑においては、赤に比べて有意な

差が少なかった。

3) 今回健常老人群と DAT 患者群では有意な差は認められなかった。

【考察】今回の検査では、刺激の色 (波長) の差により、健常成人群ではその差が有意に認められたが、健常老人群、DAT 患者群では、その差が明瞭に認められなかった。色覚は高次視覚中枢では、外側膝状体、皮質の V1 と V4 が関与していると考えられているが、この結果はこれらの神経中枢の加齢による変化 (老化現象) を反映している可能性を考えた。今回の結果では健常老人群と DAT 患者群では有意な差は認められなかったが、これは健常老人群の平均年齢が DAT 患者群に比して有意に高かったことが原因と思われた。

また、緑 (567 nm) が赤 (660 nm) に比べて有意な差が少なかったことは、比視感度 (知覚される明るさ) の差 (緑>赤) を考慮しても興味深い結果であり、今後の課題となると思われた。

7) 痴呆患者のターミナルケア

— 痴呆性疾患療養病棟での取り組みと限界 —

小川 春江・山田 誠
 武藤真砂美・有田 敏子
 勝井 丈美 (河渡病院)

当院の、痴呆性疾患療養病棟がスタートして2年を経た。その間にターミナルステージを迎えたり、既にターミナルステージにある痴呆患者を、一般病院や老人保健施設から受け入れざるを得ないこともあった。療養型の少ない看護職員と包括医療の中で、取り組んできたターミナルケアの現状と限界について報告する。

当病棟でのターミナルケアの実態

H10年7月からの2年間に、ターミナル患者は合計11名であった。重症身体疾患によるものが10名。重度痴呆で経口摂取不能によるものが1名。その後の処遇の内訳は、他病院への転院が4名。老人保健施設への転出が1名。他の病棟への転棟が3名。当病棟で死亡が2名。現在も療養中が1名である。ターミナルケアの期間は半月から7ヶ月 (平均2ヶ月) であった。当病棟より転院・転出した患者は、2名以外は全員2ヵ月以内に死の転帰をとっていた。

症例：TN 92才 男性 アルツハイマー型痴呆 摂食困難

重度の痴呆で叩く、蹴る、髪をむしるの暴力を伴う介護拒否があり老人保健施設から入院。食事への関心がな